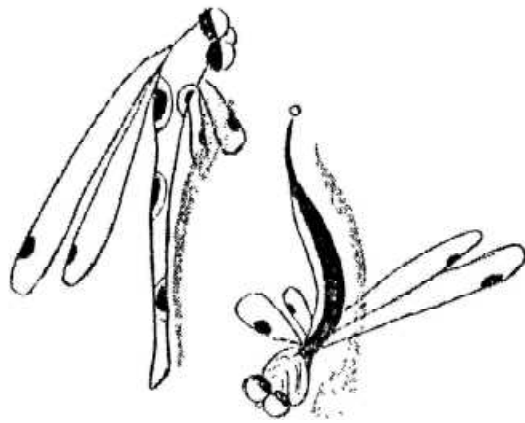

すずむし

SUZUMUSHI

Vol. 4 No. 2

1954年 8月



倉敷昆虫同好会

目 次

蝶類資料 (2)	広瀬 義昭	(1)
おとしぶみ		(4)
黒田でアカサシガメを採集	小野 洋	(4)
黒田でエゾスズメを採集	小野 洋	(4)
通 信		(4)
編集後記		(4)

蟬 類 資 料 (2)

広 瀬 義 晴

筆者はかつて本誌VOL. 2 No. 11に「倉敷産蟬類覚之書」の標題の下に、発聲性の蟬に用する生態、形態等に目する知見を記したが、本稿で取扱うものは倉敷産の蟬のみではないし又今後発表のものも倉敷産以外の蟬について記すことがあると想うので、上掲の標題の如く改め、覚之書(1)以後に得た本類の知見を少々記してみたい。以下の筆者の粗雑な観察に対して会員諸氏の資料の御呈示及び御高教を賜らば幸である。

⑤ 岡山市金山で聞かれるヒグラシの昼鳴きについて

ヒグラシの発音活動は冷湿と暗さの條件で、普通早朝と夕方とに鳴くとされており、又日中でも成虫の居る場所が丁度朝夕に類似した状態に暫時置かれた時、即ち驟雨とか夕立前の涼風等が成虫の生棲場所をかすめ、周囲が薄暗くなつた時には直ちに鳴くと云う。しかし直音間これら環境の音化なくして、本種の発音活動の盛んな状態を細察しているので、以下簡明にその状況を記してみたい。

筆者の観察したのは第1回は1952年7月18日、第2回は同年7月22日、第3回は1953年7月26日であつて、いずれも頂上付近にのみにてその鳴声が聞かれた。3回共筆者が頂上に到着したA.M. 10.30-11.00には既に鳴き始めており、下山する近のP.M. 1:30-2:00近少の強弱はあつたが鳴き止むことはなかつた。3回の観察当日共いづれも晴天であり、本種の鳴き声は焼けつくような真夏の太陽の下に聞かれたのであつた。頂上付近の環境について記すと、頂上には神社、人家があり少く畑地もあるが、頂上附近は大部分雑木とアカマツでおおわれ、一部を除いて殆んど展望がきかない程これらの樹木が繁茂している。本種はこれら雑木とアカマツの混生林に棲息しており、その棲息地域は極限されている。筆者は本種の鳴声を聞いた経験が少ないので、本例と他の例と充分比較することが出来ないが、本例の如く山地に於ける本種の晝鳴きには、やはり山地といつた環境がこのよ様な日週期の変調と大に關係するのではないだろうか。山地での本種の晝鳴きの観察例は少ない様で、古市景一氏によれば伯耆大山等に於ても晝間本種の鳴声はよく聞かれる由である。鈴木代(1953)により発表された本種の晝鳴きは純然たる平地での、しかも9月下旬と云う発生末期の観察である。

一般に日週活動のはりきりしている昆虫にも、発生の初期を過ぎると季節の推移に伴う環境の変化によつて日週活動が著しい変調を示す傾向が見られ米従つて本種の発生末期には平地でも晝間にその鳴声を聞く機会が少いのではないだろうか。鈴木代の観察もこの様なもの(例えば秋期のカトリヤンマでは夏期に見られる判然とした未明及び夕暮の日週活動の現律性が乱れて著しい変調を示す。(大内1953))

ではないかと推察するか如何。

とにかく本種の晝鳴きについて究明すれば種々興味ある点も判明するであろう。本例では上記の如く、観察は7月中、下旬のしかも晝間のみにして出来なかつたのであるが、この金山山頂の本種が早朝及び夕方に鳴くかどうか、又7月中・下旬以後の鳴声活動の日週性が変化するかどうか、変化するとすればどのような経過をたどるか等の点について観察出来れば山地に於ける本種の晝鳴きの現象を解析するに何らかの手掛が得られると思う。

追記：以上は1953年夏の知見の録音であつて、本橋崩壊後の7月28日当山を訪れた際は、前回と気象状態等全様にもかゝらず、頂上付近で只1頭の鳴声さえも聞き得なかつた。只下山の途中、過去の回の採集行では1回も聞くことの出来なかつたところの附近でかなり多数の本種が鳴いているのを聞いたのみであつた。しかしこの時は時刻は既に13:00で、しかも雲が太陽をおおい、なにか夕立めいた風が吹いて、ザワザワと附近の木々を鳴らしているような状態であつた。幸い雨は降らず、すぐ晴れたが、雲間から太陽が出てカツと照りつけると一斉に鳴りをひそめてしまい、全く気象条件に左右されているようで興味深かつた。なお登頂の際はこの箇所でも鳴声を聞かなかつた。

ともかく金山のヒグラシについては精査する必要があると思う。(1953.8.21記)

この参考文献

- 1) 八木 誠政 (1931) : ヒグラシの生態學的觀察, 理学界29(10):11-15
- 2) 加藤 正世 (1950) : 日本の蝉; 66
- 3) 大串 龍一 (1950) : ヒグラシの晝鳴き, 新昆虫3(10):23
- 4) 鈴木 成美 (1953) : 昆虫らくがき集, M・D・Kニュース 6(1):10

◎6. 1953年のフマゼミの終鳴期 ～ 岡山・倉敷を中心として

1952年の記録は既に覚之書(1)に記しておいた1953年も不完全ながら一応観察することが出来たので、その終鳴状況を記し、更に前年の記録とも合せて考察してみたい。

倉敷市田之上の自宅附近で観察したところによると本種の発生は7月下旬乃至8月上旬に始まり、8月10日頃を頂点として以後急激に減少8月20日前後には1日僅かに1・2頭の鳴声を聞き得る程度であり、25日以後はもはや連日聞く事が出来な

理化学器械

生物、地学標本模型

昆虫採集用具

テレビ、ラジオ、真空管、テ

舞津製作所岡山県代理店

サカ工商会

倉敷市栄町 (赤木病院西)

電話 913番

テ
レ
ビ
コ
ー
タ
ー

った。個体数の多い地域ではその終鳴状況はこの観察より多少ズシるかも知れないが、しかし8月下旬に至ればいずれの地域でも、もはやその鳴声を聞く事は稀である。

そこで8月末頃からの鳴声記録をメモより拾い上げて下記してみる。

- 30-VIII 倉敷市通津(倉敷レイヨン工場にて) A.M.12:00 快晴 鳴声数回
 31-VIII 倉敷市田之上 A.M.12:00 晴
 5 - IX 倉敷市田之上 A.M.10:30—11:00
 快晴. 2ヶ所で力強い鳴声を計4回聞く
 9 - IX 岡山市浜(岡山榎山高校宇野校舎にて) A.M.9:30 快晴. 力強い鳴声数回

以上は筆者個人の観察なので、観察範囲も狭く、甚だ不完全なものであるが、1個人で非常に注意して観察してもこれだけの記録しか得られないのであるから8月下旬～9月上旬の本種がいかに少いものであるかがわかれると思う。1952年の記録も終鳴日は7-IXであつて本年の9-IXに始んど等しく、兩年の終鳴日に至る経過からも、当地方に於ける本種の終鳴期は大体9月上旬であることが判明し、又終鳴日の限界は10-IX前後であることも推察される。なお大後、鈴木代(1948)によれば岡山での本種の終鳴日は統計年数2年で28-VIIIであり、これを筆者の1952,3 兩年の観察と比較すると、丁度標準終鳴日とも云うべきものに当ると思われるが、何方両資料とも2年間の統計でははつきりしたことはわからない。

1952,3 兩年の記録を気温の面からも考察してみたかつたのであるが、現在手許に資料がないので今後の機会に譲りたい。

ついでながら前記両代による岡山近辺の各地の終鳴日の記録を下に掲げて参考に供する。

地名	終鳴日	最低気温	統計年数
岡山	28 VIII	21.9°C	2
広島	15 IX	18.8	7
神戸	31 VIII	22.4	8
須度津	14 IX	19.8	5

この項参考文献

- 1) 大後美保・鈴木雄次(1948):日本生物季節誌:108-110
- 2) 広瀬義躬(1952):倉敷産燻類巻之書(1).すずむし2(11)116-119

(1953,8,22,稿)

志賀製品

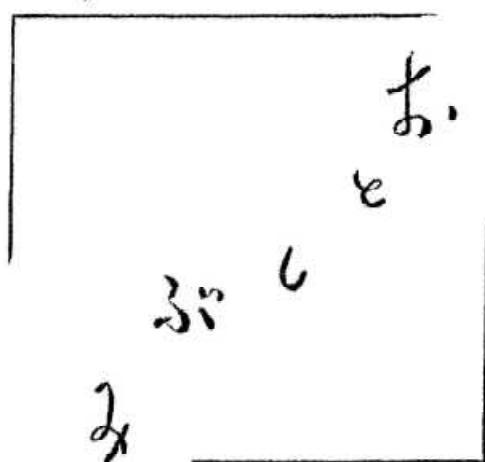
昆虫・植物採集用具

理化学器械

岡山市西中山下(柳川交叉点東)

永瀬教育堂

電話 4725番



黒田でアカサシガメを採集

本種 *Cydnochoris ruscatus* STAL. は山地には稀ならぬものであるが平地では少い。1954年6月20日、黒田に採集を試みた際クヌギの葉上に静止する本種を捕獲したので報告する。(小野 洋)

黒田でエゾスズメを採集

1954年6月20日、黒田で路上にアリ類の攻撃を受けつゝもがいている本種 *Phyllosphingia dissimilis* BREMER を発見採集したので報告する。当地方としては新しい記録なので青野代の目録に14番目の種として追加する。(小野 洋)

〔通信〕

少年昆虫会： 只今すぐ去し第4巻1号より与号頂きました。常に齊らぬ御尊意に対し深く感謝します。

印刷がきれいになった事は大変結構です。貴重な観察記録も判読出来なくては役に立ちませんから、費用の関係からか少々遅れている様ですが、数少ない月刊誌のナンバー

ワンとしてどうかカンパツテ下さい。編集等多少難はありますがともかく全国一のアクチブな益会数昆虫同好会の名に恥じぬものと思います。

今後の発展をお祈りします。

まずは御礼まで。 敬具

7月20日

~~編集~~ 「夕やけ小やけの赤とんぼ」
~~集~~ 後… 赤とんぼの歌は大好きです
~~記~~ この歌を聞いているとなんだか
 なつかしい気持ちになります。」

可愛らしい少女の手記の一節である。三木露風のうたつたる〇年前のこの歌は、いまにまだ美しい夢を詠つて大人にも子供にも愛唱されている。だがお盆が過ぎ秋のさざしが日一日と深まり行くのに今年はトンボが稀にしか見られないという。

ツバメが減つて、サギが減つて、川にメダカの行列がなくなつて、こんどはトンボさえも見られなくなつたという。人々の心から詩が、夢がなくなつたら何と淋しいことだろう。これらの原因が農薬によるものではないかと岡山の新聞はこの問題を扱上げた。水中で成長するトンボの幼虫が農薬の影響を受けることは当然考へ得ることだし、本当にトンボが減つたのか、或は気候の関係で発生時期が遅れているのか、その他代々に興えられた問題は多い。

☆美を愛し、自然を慕う人々の理想郷の一つ、大山国立公園を訪れる者達といふほど夏山に趣をそえる蝉の声に研究のまじごとを向ける翁はいか程だろうか。すかすかしい朝の小鳥の声と共に蝉の声は我々の珍重するところ。広海氏寄稿された“ヒブラシの書嚙き”は身近な体験に触れているだけに興味深く読まれたことと思います。

すずむし 第4巻 第8号 昭和29年 8月31日印刷
昭和30年 8月31日発行

編 集 兼 倉敷市住吉町 岡山大学農業生物研究所
発 行 者

害 虫 学 研 究 室 内

倉 敷 昆 虫 同 好 會